令和三年度
「モラル・エッセイ」コンテスト
優秀作品集

福島県教育委員会

令和三年度　道徳教育総合支援事業

「モラル・エッセイ」コンテスト優秀作品

【　中学生の部　】

最優秀賞	「カール先生と甚平と雪駄」	いわき市立小名浜第二中学校	三年	木村　友織香	さん
優秀賞	「認め合う」	南会津町立荒海中学校	三年	星　綾乃	さん
優秀賞	「ランドセルに思いを乗せて」	いわき市立小名浜第二中学校	一年	小泉　つばさ	さん
優秀賞	「大切な友の話」	二本松市立東和中学校	三年	菅野　心花	さん

【　高校生の部　】

最優秀賞	「民話の語りを通して」	会津農林高等学校	三年	大竹　美保	さん
優秀賞	「私の夢」	会津農林高等学校	一年	長良　遥香	さん
優秀賞	「ある放課後の親切」	好間高等学校	三年	杉山　綺音	さん

【　一般の部　】

最優秀賞	「家族」	会津若松市在住	大竹　英子	さん
優秀賞	「やさしい人に」	二本松市在住	鴫原　美紀	さん

カール先生と甚平と雪駄

いわき市立小名浜第二中学校
三年　木村　友織香

私の学校には、カール先生というＡＬＴの先生がいた。私たちが中学校に入学してからずっと、熱心に英語を教えてくれた。とてもパワフルで、フレンドリーで、たくさんの生徒から好かれていた。

そのカール先生が、今年の夏、母国であるアメリカに帰国することになった。私は卒業するまで、ずっとカール先生に英語を教えてもらえると思っていたので、その知らせを聞いたとき、ショックでしかなかった。

ついに最後の授業の日。教室に現れたカール先生は、甚平と雪駄を身にまとっていた。この甚平と雪駄は、どうやら先生方からプレゼントされたものらしい。私はその話を聞き、まず、先生方の粋な計らいに感動した。日本が大好きなカール先生にとてもぴったりだと思うのと同時に、「アメリカに戻っても、日本や私たちのことを忘れないでね。」「日本から応援しているよ。」といった温かいメッセージが込められているような気がしたのだ。

そして、プレゼントされたものをすぐ身に付けるカール先生の行動にも驚いた。日本人は、いただいた物を本人の前であけることは失礼というような感覚を持ち合わせているように思う。しかし、カール先生のように、自分がプレゼントした物を目の前で見て、喜びをすぐに伝えてくれたら、お互いに幸せな気持ちになることは間違いないだろう。実際、先生方もカール先生の甚平姿を見て、とても嬉しそうな顔をしていた。

最後の最後まで、私たちはカール先生から英語だけではなく、日本人と外国人としての交流や、日本という国にとらわれない考え方を教えていただいた。カール先生と過ごした二年とちょっとの時間は、言葉はうまく伝わらなかったかもしれないが、楽しい時間であり、私たちに幸せをもたらしてくれたと思う。

改めて、人と人とを繋ぐものは、言葉ではなく、心であるということを強く感じることができた。

認め合う

南会津町立荒海中学校
三年　星　綾乃

これは、私が中学二年生の時の話である。

私は、中体連の陸上大会で女子１５００メートル走に出場した。中一の時から何回か出場してきたのだが、毎回胃が痛くなる程緊張する。元々勝負事が苦手な私は、張りつめた空気の中、自分とは比べ物にならないぐらい力のある選手たちに囲まれ、震えながらスタートラインに立った。やっとのことで走り終え、見慣れた顔を探していると、私より先にゴールした他校の選手が口を開いた。

「おつかれ様でした！」

すると、他の選手たちもその言葉につられて

「おつかれ様です！」

「速かったですね！」

など、笑顔でお互いを讃え合った。その様子を見て、私も心が温かくなり、予選を突破した選手に

「次も頑張ってください。」

と声をかけた。いつもなら絶対にしない行動だった。スタート前はあんなにピリピリしていたのに、終わってみればこんなに和やかな会話ができていることが信じられなかった。家に帰ってからも選手たちの笑顔が頭から離れなかった。

この出来事があってから、私は考え方が少し変わった。今までは他の選手のことは順位を争う敵としか思えなかったけど、一緒に辛いことを乗り越える仲間、私を引っ張ってくれる良きライバルと思えるようになった。いくら結果に差があっても、限界を超えて頑張ったのは相手も自分も同じ。そう考えると心が軽くなり、走りきった自分に少し自信が持てるようになった。

「お互いを認め合うこと」は簡単なことではない。しかし、勇気を出して一歩進んでみると、今までとはちがう新しい世界と出会うことができる。私も、あの時声をかけてくれた選手のように勇気を出して前に進んでいきたい。

ランドセルに思いを乗せて

いわき市立小名浜第二中学校
一年　小泉　つばさ

「使っていないランドセルを、宝物にしてくれる子がいる。」

今年の七月に、妹のランドセルを見に、ショッピングモールへ行きました。そこで見たパンフレットの裏に書かれていた言葉です。その言葉に興味をもち、帰った後、インターネットで調べてみました。

それは、役割を終えたランドセルをアフガニスタンの子供達へ寄付する国際支援活動でした。ランドセルを受けとることで学校教育を受ける機会が生まれ、読み書きができるようになり、アフガニスタンの子供達の人生に大きなチャンスを与えているというのです。

それを知った私は、

「私のランドセルをもう一度誰かの下で役に立てるなんてすごい！」

と思いましたが、小学校入学前に祖父母に買ってもらったお気に入りのランドセルだったので祖母にも相談してみることにしました。すると、祖母から

「物は使われてこそ生きるのだよ。ランドセルも第二の人生を送れるなんて幸せなことだと思うわ」

と言われました。

私と一緒に六年間毎日一緒に学校に通ったランドセル。茶色にピンクの刺繍が入ったとてもかわいいランドセルですが、思い出は私の心にずっと残っています。

そんなランドセルがアフガニスタンの子と共にまた学校へ通うのかと想像するととてもわくわくします。ランドセルを手放す前にきれいに拭いてお礼を言って段ボールへ入れました。

アフガニスタンにいる子とまた毎日楽しく学校へ行ってくれることを祈っています。そして、教育を受ける機会がみんな平等になれる世界になるよう心から祈っています。

大切な友の話

二本松市立東和中学校
三年　菅野　心花

今までにないくらいの緊張と不安に押しつぶされそうになったのは、それが私にとって中学校最後の大会だったからだ。大好きな陸上を始めて七年。一つの節目の大会だった。

「無理だ」「どうせ負ける」弱音ばかり吐き、走る前からレース後の悔し涙ばかり想像した。そんな私に大きな力と勇気をくれたのはクラスのみんなの存在だった。前日、みんなが伝えてくれた「頑張れ」が私の背中を押してくれた。たった一言だけれど嬉しくて、その一言が私の一番の力になった。

大会が終わり、誰もいない教室に入った時、レース前の緊張と不安が涙に変わったのは、黒板いっぱいに描かれたクラスのみんなからの「おつかれ」のメッセージを見たからだ。ほんの些細な日常での出来事だった。でも、私には特別なイベントのように心に残った。それは、みんなの優しさが確かに私に伝わったからだ。

一人では何もできない弱い私だけれど、みんなの力を借りればどこまでも頑張れるような気がした。クラスのみんなの優しさに私は涙を止めることができなかった。私のクラスは、頑張る誰かを全力で応援できるクラスだ。相手を想うその優しさでたくさんの人を助けることができるクラスだ。一人一人がそんな心をもつ私のクラスは、相手の悪いところではなく、良いところに目を向ける。そして、互いに認め合い、自分に足りない部分を取り入れ、成長できる場所だ。このクラスで過ごす毎日がそれを実感させてくれた。

中学校三年生の私たちにとって、卒業まで残された時間は日に日に少なくなっていくばかりだ。それでも離れる寂しさばかりではなく、この三年間で培った優しさで笑顔を増やし、楽しい毎日を過ごしていけることが今の私の一つの願いだ。大好きなみんなとは、離れていても会えなくても互いを想い合える。いつまでもそんな優しいクラスでありたい。

民話の語りを通して

会津農林高等学校
三年　大竹　美保

「なんだぁにしぁ、むずせなぁ。いっぺぇうまっちゃから、ぶんなげらっちゃのがぁ。」これは「身知らず柿の話」という会津坂下町の民話の一部です。私は昨年全校生への「読み聞かせ」で「語り部」としてこのお話を披露しました。

私が語り部をやろうと思った理由は、図書委員会で実施した「民話勉強会」で語り部の先生の語りが素敵で、直感的にやりたいなと思ったからです。また思いの外、他の人が会津弁を話せず驚いたと同時に、やらなければという使命感にかられました。私には祖父母がおり、小さな頃から方言にはなじみがあります。そんな私でも完璧に話し、理解することはできません。方言を話せなければ方言と相性のいい民話まで失われてしまいます。民話は古人の知恵話もあり、守るべき価値のある温かい伝統文化であると思いました。

「読み聞かせ」の担当が私になり、練習を重ねましたが、標準語との抑揚の違いに苦労しました。練習は先生の語りを録音し、自ら声に出して反復する方法です。何度か先生が来校し、語尾の発音や間などの指導をしてくださいました。だんだんと抑揚が会津弁に近付き、「上手になったね。」と褒めていただけるようになりました。全校生の前での発表は放送によるもので緊張しましたが、お話の情景を思い浮かべ、練習通りの落ち着いた発表ができました。発表後に同級生や先生方に「上手だったね。」と言葉をかけられ達成感と充実感を得ることができ、貴重な体験となりました。何より語り部の先生から「立派だったね。継承してくれてありがとう。」という手紙をいただき、とても嬉しく思いました。

民話は失われつつある大切な伝統文化です。方言と共に残された先祖の言葉であり知恵であり、消えてしまえば戻ることのない尊い文化です。私は先祖から受け継いだ伝統の灯を絶やさないためにも、今後どんな形であれ、語り部の継承を続けていこうと思います。

私の夢

会津農林高等学校
一年　長良　遥香

私は中学校卒業を目前にして将来の夢について悩んでいました。高校に入学したら何を目標にして頑張ればいいんだろう。三年経ったらもう就職するのかもしれない。そんな事を考えていた時に夢ができるきっかけがありました。それは担任の先生が教室に持ってきたギターでした。

私は小学生の頃から趣味でギターを弾いていましたが演奏を聞いたことがあるのは家族だけでした。私が教室に置かれているギターを見ていると、私がギターを持っている事を知っている友達が「弾けるんだったら聞かせてよ。」と言ってきました。教卓の前に座っていた先生に許可を得ようとした時に、先生が教卓のイスを空けてくれて私は内心ドキドキしていました。私はイスに座って友達の前で少しだけギターを弾きました。するとギターの音を聞いたクラスの女子達が「歌える曲を弾いて欲しい。」と近寄ってきたのです。私のドキドキはさらに増していきました。そんなドキドキを抑えながらギターを弾き始めるとクラスの女子達は笑顔で歌ってくれていました。途中から女子達より後ろで低い声で歌を歌っている声が聞こえてちらっと見てみると、男子が肩を組んで歌っているのが見えました。最初は少し躊躇してギターを弾いていたのですが、弾いている内にどんどんと気分が上がっていって最後の方は躊躇なくギターを弾いていて、この空間がずっと続けばいいのに、と思っていました。

曲を弾き終わった後は体中が熱くて、人前でギターを弾くことの楽しさを知ることができました。私はその時から音楽で人が楽しめる空間を作りたい、人前で自分らしく演奏をしたいというあやふやですが絶対的な夢ができました。あの日に先生がギターを持ってきていなかったら、皆が歌ってくれていなかったら今の夢は絶対に決まっていなかったと思います。もう一度皆で会う機会があったら肩を組んで私の演奏で歌ってほしいです。

ある放課後の親切

好間高等学校

三年　杉山　綺音

この間の学校の放課後、私はいつも通りバスに乗っていた。私はいつも決まったバス停で降りていたが、この日は違うバス停で降りた。

私がそのバス停で降りようとした時に接点のない後輩が降りられない様子でいた。後輩はバスカードを友達に貸したままだということを忘れていたらしい。そのままバスに乗って降りられないことに気がついたけれど、周りの友達に助けを求めても「小銭がない」と言われていた。

それを見た私は定期の他にバスカードを持っていたので、後輩にバスカードを渡しに行くことにした。あまり話したことのない後輩だった。でもバスカードを渡したら「ありがとうございます。泣きそう。」と言われた。私は手助けが出来てとてもうれしかった。その後、「明日必ず返します。」と言われ別れた。

次の日、学校に着くと昇降口に昨日の後輩が友達三人と待っていた。後輩はお金を返してくれた他にいちごワッフルといちごミルクをくれた。私は申し訳なく思い、「バス代を貸しただけですよ。」と言うと「本当にあの時は降りられなくなりそうだったんです。」と言った。私は素直にもらった。実は私は前からその後輩がバスで席をゆずる姿やおばあちゃんの手をひいて、席に座らせる姿を見てきた。だから本当にその後輩は優しい人なんだと思っていた。

その日の放課後、またバスで後輩と会った。後輩は「いちごワッフルおいしかったですか。」と話しかけてきた。それから会釈をしてくれるようになった。少しのきっかけで仲良くなれた気がした。

私は見返りがほしいわけではない。私は後輩の親切な姿を見て親切な人になりたいと思ったのだ。だから困っている人を見ると助けたくなる。そして、私は将来、警察官を目指すことにした。

家族

会津若松市在住
大竹　英子

十三年前、主人が目の不自由な義姉を引き取り、三人で暮らすようになりました。義姉の夫が亡くなり、一人で生活をするのは無理だったのです。義姉は糖尿病や高血圧の疾患を持っています。一日に四回、インスリンの注射をしなければなりません。目が見えない義姉に代わり、私が責任を持って注射を打つことになりました。

十年前、東日本大震災が起きましたが、その一週間後、夫が避難中にがんで亡くなりました。残された義姉を連れて、各地を転々とし、会津若松市に避難してきました。慣れない土地で生活するのに、不安だらけでした。言葉で表現ができないほど、辛い日々を過ごし、泣いてばかりでした。

ある日、会津若松市に大熊町立小・中学校が移転されたことを知りました。「学校で学びたい」という思いが強くなりました。私は中国出身のため、日本語で分からないことがたくさんあるからです。そのことを義姉に話しました。すると「勉強するのは良いことだ！英子の夢は、縁のある方に感謝の手紙を書くことでしょう。」と義姉が言ってくれました。そして、大熊町教育委員会にお願いし、聴講生として勉強させていただくことになりました。

学校で勉強をしたり、義姉の介護をしたり、私の生活は忙しくなりましたが、充実し始めました。私が書いた手紙を音読し、それを聞いた義姉が直してくれるようになりました。私も義姉もハンディがあるので何をするにも必死でした。こうして、十三年間、二人でひたむきに歩んできました。

大熊中学校を卒業する日、義姉は朝早くからヘルパーさんと一緒に車椅子で来てくれました。涙を流しながら私の卒業を喜んでくれました。嬉しそうに、割れんばかりの拍手をしてくれました。義姉を支えるばかりではなく、私も義姉に支えられているのだと感じました。私は義姉と家族になれて幸せです。

やさしい人に

二本松市在住
鳴原　美紀

日々子どもから学ぶことは多い。私は中学校で働いている。今は三年生の担任だ。三年間見てきた生徒なので、学級経営などに対する慣れも多少は出てきた。しかし、三年前は今のような気持ちは持っていなかった。むしろ、担任をもつのはちょっと嫌だな…ぐらいに思っていたと思う。自信がなかったのだ。

今の学年の生徒を受け持ち、担任としての経験がゼロだった私はとにかく必死だった。どうすれば学校を楽しいと感じるだろう、どうすれば積極性が出てくるだろう、どうすれば互いの関係がよりよくなるだろう、考えることはいっぱいだ。

その中でふと、ある活動を思いついた。「教室にお花を咲かせる活動」だ。難しいことはなく、クラスメイトの頑張っているところやよいところをお花（をかたどった紙）に書いて掲示板に貼るのである。二か月ごとに教室にはその季節の花が咲く。そしてそれは意外とあっという間に満開になる。放課後一人でのんびり見てみると、私が知らないことがたくさん書いてあった。「給食をたくさん食べてくれてありがとう」「数学のわからないところを教えてくれてありがとう」「走っているところがかっこよかったよ」二か月後に花をまとめてそれぞれの生徒に渡すのだが、生徒たちはこれをちょっと照れくさそうな顔で眺めながら読み返す。

誰かを認め、自分も認められるという実感をもつことでやさしい人間が育まれると思う。この活動を三年間続けてきた今、生徒たちは自分の気持ちを言葉にしたり、自分と違う考えを受け入れたり、人に寄り添うことが当たり前にできるようになった。少しのアイデアを渡すことで子どもたちは自分たちで考え、発展させ、しっかりと成長してくれることを私は担任になって初めて知ることができた。

卒業まであとわずか。この子たちは社会に出てもきっとやさしい大人になる。私はそう信じている。

ひとつ、ひとつ、
実現する
ふくしま